

このたびの能登半島地震は甚大な被害をもたらしました。被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。現在会員登録数 4,219 人さま。次号は 2 月 20 日発行の予定です／

+-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇-----+

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

+-----+

【1】お知らせ

● 第19回国際グリム賞 贈呈式・記念講演会

講師：クレア・ブラッドフォード博士（第19回国際グリム賞受賞者）

演題：「オーストラリアの緑との交流 オーストラリアの絵本における植物と人間のかかわり」

日時：2月4日（日） 14：00～17：00

会場：国民會館 武藤記念ホール（大阪市中央区大手前2）

定員：70人（申込先着順） 参加費：無料

主催：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団／

一般財団法人 金蘭会／大阪府立大手前高等学校同窓会 金蘭会

お申込み、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/01_grimm/index.html#19ceremony

● 「日産 童話と絵本のグランプリ」40周年記念フォーラム

「童話を語る・絵本を描く - 童話・絵本のつくり手を目指すみなさんへ -」

「第40回 日産 童話と絵本のグランプリ」表彰式で、本グランプリ審査員による、40周年記念フォーラムを開催します。

日時：3月9日（土） 13：30～15：30

会場：大阪府立中央図書館 ライティホール

講師：黒井健（絵本画家）、高島純（絵本作家）、
富安陽子（童話作家）、吉橋通夫（児童文学作家）

進行：宮川健郎（IICLO 理事長、児童文学研究者）

定員：70人（申込先着順） 対象：中学生以上 参加費：無料

主催：大阪国際児童文学振興財団

協賛：日産自動車株式会社

お申込み、詳細は ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#40forum

● 寄付プレゼントキャンペーン実施中です

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

期間中、1万円以上ご寄付いただいた方に下記の中からおひとつプレゼントいたします。

◇キャンペーン期間：令和5年12月～令和6年1月

◇プレゼント内容：

〈1〉富安陽子さんのサイン本 1冊（限定20冊、抽選）

〈2〉イイクロちゃんグッズ 全種類セット

〈3〉当財団発行の報告集 1冊

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html#campaign_r5

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式X（Twitter） → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『わたしたち地球クラブ』 キャリー・ファイヤーストーン/著 服部理佳/
訳 小学館 2023年12月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：12歳のメアリーは近所に住む親友のルーシーの原因不明の病気のため、不安に感じている。メアリーは、SDGsについて考える実験的な地球クラス10人の1人に選ばれ、ショーンという黒人の少年と「生ごみ堆肥」問題について取り組むことにする。町のりんご祭りで地域助成金のコンペが行われると知り、地球クラスからも応募するが、応募者の一人であるショーンが町の住人でないという理由で出展できないことが祭りの当日にわかる。ちょうど、町では町長選が行われており、再選を狙う現町長とルーシーの学校の英文科の教師で、ルーシーの年の離れた姉の親友でもあるレイン先生が候補者になっていた。

T：広い視野で環境問題を扱いながら、物語としてもおもしろい作品でした。

Y：環境問題は、生ごみの堆肥化、排気ガスの問題、持続可能なファッション、食肉産業が地球におよぼす影響など、多様な問題が扱われています。

T：これは、地球クラスのメンバーがそれぞれ自分に引き寄せて環境に対する課題を考えていることで可能になっています。メンバーは住んでいる場所も文化的背景も家庭環境も異なり、バラエティーに富んでいます。

Y：環境問題は、政治と深くかかわっているということがわかるように描かれている点も興味深かったです。

T：黒人が多く住む地域にごみ焼却炉があったり、ショーンが町の補助金の対象者から除外されたり、身近かつ具体的な事例から、環境問題と政治が深くかかわっていることが書かれています。

地球クラスが同年代の子どもたちの多様性の場だとすると、メアリーの家族を描くことによって世代間の多様性も描かれています。

Y：メアリーは両親が年をとってからの子どもで、メアリーには年の離れた姉と兄がおり、姉には赤ちゃんが生まれてメアリーはゴッドマザーになります。

T：やや保守的な両親、リベラルで親友が町長選に出馬する姉、メアリー、赤ちゃんという4世代にわたり、世代によって環境のとらえ方が違います。そして、メアリーは赤ちゃんの将来に責任を感じて未来を見据えます。

Y：物語のおもしろさとしてはどうですか。

T：ルーシーの病名がわかるか？町長選の結果はどうなるか？という疑問が読者に次を読ませます。短い章立てで、地球クラスに参加する動機を書いた作文、10年後の自分にあてた手紙やメアリーから姪である赤ちゃんへのメッセージ、ポッド・キャスト、メールのやりとりなど、様々な文体の文章が含まれていて変化があり、読みやすくなっています。また、現町長や、地球クラスの代理の先生、両親など、主人公のメアリーの行動にブレーキをかける人がいることで、リアリティが保たれています。

Y：私は、地球クラスの活動を通して子どもたちが、社会の課題にテーマを持ち、調べ、発信し、自分たちでフェスティバルまで開催してしまうという点がとても現代的だと思いました。子どもの政治参加、社会参加が描かれています。

T：とはいえ、子どもに投票権はありません。「投票できないんだから、せめてサンドイッチボード（発言者注：現町長の再選を訴えるボード、そこに現町長も立っている）に卵を投げつける権利くらいあってもいいんじゃない？」（p.289）というメアリーの言葉ににやりとしてしまいました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第101回「林の底」

梟への「試験」

〈風もないしずかな晩〉、ある年寄りの梟が〈私〉に語りかけるところから物語は始まります。〈私〉は梟など信用できないと思いつつ、どんな話をするか聴いてみるのも悪くないと思い、聴き手となります。

〈わたしらの先祖やなんか、鳥がはじめて、天から降って来たときは、どいつもこいつも、みないち様に白でした。〉梟は、名高い〈とんびの染屋〉を話し出します。鳥がどれも白では見分けがつかず、間違いも多いため、手が長く鳥を染壺に入れるには都合がよかった鳶が染屋を出すことになりました。はじめは鳶も〈油が乗ってましたから、頼まれたのはもう片っぱしから、どんどんどんどん染めました。〉こうして鳥たちに喜ばれていましたが、そのうちに鳶は〈いい気になり〉、〈金もできたし気ぐらいもひどく高くなって〉、〈おれこそ鳥の仲間では第一等の功労者というような顔をして〉怠け始めます。

あるとき客として鳥がやってきますが、鳶は明日来てくれと繰り返す、仕事をしません。業を煮やした鳥に詰め寄られた鳶は、怒りに任せて鳥のからだを真っ黒に染めてしまいます。鳥は鳶の横暴を鳥たちに訴え、怒った鳥たちは鳶を気絶するまで墨壺に漬け込みます。鳥たちは鳶を墨壺から引きあげてどっと笑い、染物屋の看板をくしゃくしゃに砕いて立ち去ります。梟はそこまで話すと〈お月さまをふり向き〉、〈私〉も〈水銀いろの重い月光と、黒い木立のかげの中を、ふくろうとわかれて帰ります〉。

このように、説話「鳶の染物屋」をふまえながらも、物語は語る梟と聴く〈私〉のかけひきを重点化していきます。なぜ梟が「鳶の染物屋」を語るのか、なぜ〈私〉は梟を信頼しないのか、物語の前提が読者には示されないまま、両者の腹の探り合いともいえる心理戦を読者は見届けることとなります。

ところで、〈私〉の関心事は「鳶の染物屋」自体にあるのではなく、梟が〈よく辻棲のあうように、ぼろを出さないように云えるかどうか〉に置かれています。梟を信用せず、中身に破綻がないかを注視する〈私〉の梟への「試験」を、〈私〉はどう評価したのでしょうか。これについての言及はありませんが、お互い言葉を交わし合うことはなく、〈私〉が早々に立ち去るという結末を見る限り、やはり厳しいものだったのかもしれない。(ペ吉)

(本文の引用は、『宮沢賢治コレクション 4 雁の童子』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 55

らいおんみどりは、キャベツをくるくるまわしながら、しんまできれいにたべると、もうふをはねのけて、とびおきました。

そのひょうしに、もうふがたなへぶつかり、のこりのキャベツが二つともベッドの下へ、ころげおちました。

「やれやれ、なんて、せわのやけるキャベツだ。たべちゃうぞ。」

らいおんみどりはベッドの下へもぐってキャベツをつかむと、まるごと口の中へ、ほうりこみました。つづいて、もう一つのキャベツも。

(『らいおんみどりの日ようび』中川李枝子/作 山脇百合子/え 福音館書店
1969年3月初版、引用は2022年12月43刷 p.5)

子どものころ大好きな作品の一冊でした。まず、ライオンなのに、キャベツしか食べないところに親しみを抱きました。とはいえ、ライオンらしく、「たべちゃうぞ。」を頻発します。キャベツだけではなく、床へずりおちてしまった毛布に対しても、らいおんみどりの家にやってきた白ねこのトランペに対しても、ひっくり返して乗って空を飛ぶビーチパラソルに対しても、「たべちゃうぞ」と言います。けれど、本当に食べるのはキャベツだけというところに安心感があります。

それから、引用にあるようにらいおんみどりは、ベッドからとびおきますが、それは、今日が「日ようび」だからです。このあと、らいおんみどりは、白ねこのトランペ、トランペの姉でサーカスのトロ団長、雲とりあみを持っているしろくまのムクムクと出会うクロバー丘で動物たちにサーカスを披露し、そのあと、4人でババ抜きをします。友だちができ、パフォーマンスを披露し、大好きなババ抜きで終わるといふ「日ようび」らしい特別な日が描かれ、満足感を抱いて読み終わります。

そそっかしいトランペ、いばりんぼうのトロ団長、自分勝手なムクムクという、個性的な人物とらいおんみどりとのおちぐはぐな会話は、笑いを誘います。そして、トランプが飛び出す不思議な帽子や、空を飛ぶトランクや、ビーチパラソルなどの道具は、大人になれば、ごっこ遊びの道具を想像しますが、子どもの頃は、あこがれの気持ちを抱いて読んだことを思い出しました。(Y)

《4》 行って来ました！

市立伊丹ミュージアムで2月25日まで開催されている「牡丹靖佳展 月にのぼり、地にもぐる」に行ってきました。牡丹靖佳(1971-)の新作や旧作の絵画、絵本の原画など100点以上が展示されています。

全体は、「はじまりの旅」「森をさまよう」「移ろいゆくもの」「色と形の「物語」」の4つに分かれており、タブローの絵と絵本の原画で構成されていました。

「はじまりの旅」には、はじめての絵本『たまのりひめ』(「こどものとも年少版」2006年10月 福音館書店)の原画がありました。丸い頭のお姫さまが玉に乗り、後ろにお供が5人つきそいます。お姫様は頭に犬をのせ、穴に落ちます。日本画のような様式と、西洋画のデザイン画がミックスされたような絵は、どこでもない場所をイメージさせ、ナンセンスの世界へと誘ってくれました。このコーナーには『おうさまのひっこし』(福音館書店 2012年)の原画もありました。おうさまとお供たちがおうさまの持ち物をすべて荷台に載せ、旅をします。古時計や椅子、家具など10台以上も続く荷台には美しいものがこぼれんばかりに載っていて、その一つ一つを見るのがとても楽しかったです。

「森をさまよう」の絵はデザイン的な部分とにじみを聞かせたような部分と余白を活かしたような部分、鉛筆で細かく描かれた部分と自由な線などが重

ねられ、森の中にいる間に、自分が空間や時間を忘れる気持ちになる感覚が伝わってきました。動物の息遣いが聞こえたり、風が木々を揺らす音が聞こえたりする気もしました。

「移ろいゆくもの」には『たびする木馬』(アリス館 2022年)、「色と形の「物語」」には『めいわくなボール』(偕成社 2020年)の原画があり、前者は時空を飛ぶ感覚が、後者はユーモアのセンスが『たまのりひめ』や『おうさまのひっこし』と共通していると思いました。

どの絵もソフトな色が重ねられることで、ゆったりと絵の世界に入ることができました。解説に「日本料理を営む家に生まれ、祖母や母の着物姿を見て育った」と書かれており、ニューヨーク等で絵を学んだ西洋的な画法と日本の画法が調和している点が心に残りました。(K)

市立伊丹ミュージアム <https://itami-im.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第7回

第3章 あまんきみこさん

その1 『車のいろは空のいろ』

あまんきみこさん(1931年～)と母宮川ひろ(1923～2018年)は、同人誌『どうわ教室』(1966年4月創刊)でいっしょに勉強した仲間です。あまんさんは、母より8歳年下ですが、母が亡くなるまで、50年あまりも、ずっと友だちでいてくださいました。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがあります。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

● 講演会「最近の私の仕事～リンドグレーン新訳から最新刊まで～」

日時：3月2日(土) 14:00～16:00

場所：吹田市立中央図書館

講師：菱木晃子(翻訳家)

主催：吹田子どもの本連絡会 ※参加費無料、要申し込み

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

■ ----- ■
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『わたしたち地球クラブ』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ(5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/lGzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は2月13日(火)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — |

日本は厳しい冬が続いていますが、オーストラリアは南半球にあるので今は夏です。2月4日には、オーストラリアからクレア・ブラッドフォード博士をお迎えして、国際グリム賞の贈呈式、記念講演会を開催します。子どもの本の研究についての熱い思いをおうかがいするのを楽しみにしています。

(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp